

経済学部3教員が語る 日本の「食」と 21世紀の北海道



ラテン系の国など食べものを

福田都代 重視するところは、
農業を大事にしています。

サケ茶漬けがなぜ北海道でできなかったか？

古林英一 新鮮な物が多いから、
加工の必要性を感じない地域性がある。

生きていく上で必ず必要な「食」の面で

山田定市 北海道の弱点は強みになり、
そこに21世紀の可能性がある。

食べ物と土地

司会／福田先生は、外国での経験があると伺っていますが…。

福田／私は、南米での生活を経験したのですが、あそこは食用バナナをオープンで焼いたのと、いもとうもろこしが主食だったですね。とうもろこしの粉で作ったパンが結構おいしいんです。平べったい餅に近いもので、けっこう胃にもたれましたけれど、とにかく気候に合った食をしています。また、香辛料の使い方もうまいですね。地元のメイドさんが作ってくれたんですが、イグアナの煮込みも見ました。赤ピーマンとトマト、あとハーブ類でぐたくた煮込んだものです。夜の食事では、みそ汁を毎日自分で作っていましたが、下宿屋のおばさんに「よく毎日スープを食べるね」と、言われた。暑い地域ではあまりスープを飲まないんでしょうね。向こうでは意外にイカとかタコも食べ、私がイカの煮付けを作ったら結構よろこばれた。ただ、お汁粉は不評でしたね(笑)。

古林／暑い地域では、暖かいものは好まれませんね。バングラデシュの学生から教えてもらったけど、あそこでは、カレーみたいな香辛料の使い方を毎日変えて、変化をつけている。

司会／最近、ベトナムに行ってきましたが、フランス料理と中華料理の影響もあり、香辛料の強いタイ料理とかとは違ってけっこう薄味のものがありました。

古林／あそこは発酵ものがあつたり、魚醤を使うのは今、日本では秋田だけだけれど、アジアでは一般的に使われています。

福田／アジアの食べ物はおいしいと思いますし、どの料理を食べても日本人が受け付けやすい。米や餅はベトナムなどにも似たようなものがあるし、ラーメンだって中国から入ってきている食べ物なわけだし。日本人は現地でも毎日ごはんも麺類も食べられる。

バランスが働く日本型食生活

山田／ここに、需給からみた日本の食生活の変化を示したものがあります(表A参照)。そもそも昭和40年頃まで、米は需要に対して生産が不足していました。需要面では、あるところまでいくと米は相対的に減ってきましたが、日本人の食生活の変化をみると、和食という意味ではない日本型食生活がつけられているのではないのでしょうか。例えば、肉類の消費量を見れば(表B参照)、西欧では20%近くまで伸びているけれど、日本は頭打ちです。ですから、ただ『肉の消費は伸びていく』という見通しがあるけれど、それは違うのではないのでしょうか。

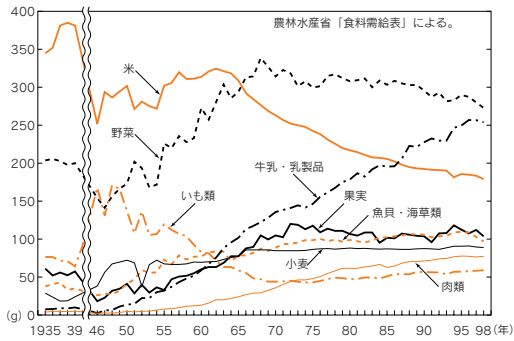
古林／『肉に魚が喰われている』『魚離れ』とは言うけれど、どちらも飽和状態になってきているんじゃないですか。『肉と魚が逆転した』と言いますが、実は、それほど魚の消費は減っていない。若い人でも結構魚が好きですね。

山田／年齢別に肉の消費を調べたところ、そんなに差はないんです。とすると、プラス思考で見ると、日本的に相性が良いものを取り入れている。『肉の自給は不可能だ、まだまだ肉消費が伸びる時に日本には飼料基盤がないので、もっとえさを輸入しなければならない。だから、自由化は避けが



左から
山田定市(経済学部教授)、古林英一(同学部教授)、福田都代(同学部助教授)

▼図A 食生活の変化(1人1日あたり供給純食料・会計年度)



たい』という主張があるけれど、実際には日本人は健全な食生活、つまり、米と魚と肉と野菜・果実を結構うまく組み合わせさせてきている。だから、需要構造の面から見ると、自給を回復することも可能であって『輸入に頼るしかない』という考え方はおかしいんです。

自給率と食糧安全保障

山田 日本はアジア圏のモンスーン地帯にあって、米が主食です。中国・インドも米の比率が高く、人口扶養率の大半を米が担っています。ここに新聞の切り抜きがあります。農水省も万が一のために食糧危機に対するマニュアルを作っているのですが、何かの事情で外国からの農産物の輸入が止まったらどうするか。米もちろん食べるけれど、頼るのはいも類となっているんですね。いも類を今の4.5倍に増やすと、いもは、反収で50~60俵、米は10俵前後と物量的に数倍もある。今のままで自給するならば、いざという時の頼りは、いも類なんです。

福田 私の親なんかは、戦前、勤労奉仕で駆り出され、毎日じゃがいもばかり食べていた。戦争体験がある親の世代になると『もう、いもを食べたくない、食料不足でいもが決め手なんて、もう私死ぬ』というかもしれない(笑)。

山田 振り返ると、食べ物の嗜好は変化しています。ある大学生協の50周年史に1950年頃の学生生活についての記録が紹介されていたのですが、その中で当時は食券制度があったとありました。その理由が分るっていて、仕送りやせつかくアルバイトで稼いだお金を無駄に使わないために、食券を前もって買っておくためだそうです。その理由のひとつは、カレーライスは贅沢な食べ物なのに、ついつい食べてしまいお金が無くなる。だから食券を前もって買って置き自製したのだそうです。戦前・戦中・戦後の食生活の中でカレーライスは『ハレの日の食べ物、お客さんが来れば出す食べ物』だったんですね。

古林 カレーライスも含め、若い人のアンケート結果では結構米を食べていますね。特に、自宅生では晩御飯にパンという人はいません。

山田 ですから、ある意味で素直な食生活を続けている。海外からいろんなものを取り入れながらも、日本人にとって『米は捨てがたいもの』となっているんじゃないでしょうか。

福田 先進国の中でもフランスでは穀物の自給率も高く、実際自由化に反対する農民のデモなどは過激ですね。ラテン系の国など食べ物を重視するところは、農業を大事にしています。自国の食べ物に自信があるみたいですよ。

ファストフードとスローフード

司会 外食・コンビニチェーンの普及で、食生活は変わりつつあるけれど『そこから出る残飯の捨てる量を計算したら、すごい量になる』というのを見て、そのバイト学生も非常に問題だと感じているようです。

福田 食事を大事にする人たちは、ファストフードの普及も問題視しています。例えば、反ハンバーガーで、イタリアやドイツで盛んになってきているスローフード協会というのがあって、ファストフードではなく、手作りのものを食べさせないと味音痴になるから、と言っている。主だったレストランなどはこの協会に入っています。

古林 ヨーロッパは、昼休みも長いわね。

福田 食事後、ハンモックで昼寝もできたり。イタリアなどのスローフード協会の人の話では、キレル子供のいる少年院で食事のとり方を変えたら落ち着いた、という例もあるそうです。

古林 食べ物自体のことだけじゃなくて『いっしょに食事をする』というコミュニケーションのあり方・時間の使い方も関係があります。外食産業でも食の研究には、相当な力を入れています。食べ物については経済的な問題だけでなく、生活や文化のあり方との関係がある。でも、僕にはコーラを飲みながら飯を食うことは理解できないけれど(笑)。あれは体に悪いですね。

粗末にされている食べ物

山田 確かに、食の商品経済的な性格が強まる中で、農産物は無駄にされています。本州方面に野菜を送っている農家では、収穫の4割を捨てることもある。形が悪いなどの理由で、スーパーなどによる商品政策の結果です。

古林 『食べ物を残すのはバチがあたる』と言われてましたな。

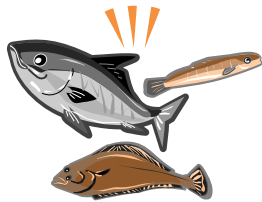
▼写真1 北海道新聞(2001年1月4日朝刊分)より

▲図B 1人1日当たり肉類の摂取量割合

原資料：国際食糧農業協会『1995年世界各国食糧農業総覧』

山田／中国では『中華料理は余るほど出すことが、礼を尽くしたもてなし方だ』と、言われていました。しかし、それは上層階級の食習慣です。今のところ食料は国内で自給していますが、これ以上人口が増えないとしても、やがて供給が追いつかなくなる。だから、そういうもてなし方をやめよう、と指摘され始めています。

食と循環型社会



古林／水産物はもともと食べられる部分は約半分、残り骨・内臓は肥料などにして100%利用できる。でも最近、安い輸入肥料に押されて、骨・内臓は肥料とされずに残ってしまうことになった。また、骨・内臓の生ごみを加工段階で処理すると、そこに廃棄物が集中してしまうんです。

福田／昔、残飯は家畜のえさになってた。

古林／そう、養豚・養鶏はもともと田舎でやるものじゃなくて、都市の近辺にあった。都市から出る残飯、魚のあらとかをえさにしていたけれど、公害問題などができて、それが成り立たなくなり、残飯が廃棄物になってしまった。有機物だったら、ほとんど何でもえさになるのに。この公害問題化で農畜産物が地域の需要基盤から切り離され、大規模化することから、循環型のメカニズムが崩れてしまった。運ぶコストも高いから、リサイクルのシステムが崩れてしまったんです。実際、東京近辺ではこの残飯を一箇所に集めているんです。

山田／安ければいい、というような目先で食べ物のことを考えることは一面的です。輸入と国内的な生産とではシステムとしての違いがあり、自給の持つ国内産業の波及効果や自然との循環ということについても、もっと注目すべきだと思います。

古林／実際、スーパーで加工され、パッケージされた野菜や魚が好まれるといたって、もともとその魚も一度は地べたに置かれたもので、それを食べているんです。いろんな意味で、消費者は食べ物の現場を知らなさ過ぎる。『苦労して作った国産米が国際価格と比べて高い』とか文句言うたり、寒い中、命がけでとったマダラを100円ぐらいで買ったらかん。

北海道の可能性

司会／しかし、市場経済化が強まる中で、北海道も農水産業の将来を考える必要がありますね。

古林／やっぱり、商売が下手な企業体が多い。サケ茶漬けがなぜ北海道でできなかったか？ 新鮮な物が多いから、加工の必要性を感じない地域性がある。あと、北海道の人は地元のことや商品知識も足らんような気がします。

山田／最近、中小企業家同友会では昆布のルーツを探る、ということで沖縄との関係を調べるため調査団を作った。『沖縄では、食べ方にもこんなに知恵と工夫をこらし、食材の良さを生かしていたのか』と再認識させられ、一方、『北と南をつなぐ昆布の口マンも感じた』そうです。北海道は工夫が足りなかったんでしょね。

司会／一次産業に基盤をおいた北海道の可能性はどこにあるのでしょうか？

山田／私の農業経済の先輩・高岡熊雄氏は『北海道は、政治的には日本国民として扱われても、経済的には内国植民地であって、明治以来、日本資本主義の調節弁的な役割をいつもしよわされてきた』と、話されていた。足りない時には北海道から調達し、余ったら切り捨てられる。200カイリ問題でも、米・石炭でもそうだった。現在もグローバル化の波をもっとも強く受けているけれど、地域別の食糧自給率で見ると、北海道は179%です。あとは東北の何県かが高いだけです。ここから食糧問題を考えると、北海道の強みになる。

古林／でも、北海道は日本の農業政策の打撃をもっとも受けています。

山田／しかし、打撃を受けても生き残るしたたかさもある。観光業でも注目されていますが、生きていく上で必ず必要な「食」の面で、北海道の弱点は強みになり、そこに21世紀の可能性がある。これまで『産業の発展で農業の比率が高いこと・中小企業の比率が高いこと』は、遅れた側面として言われてきました。しかし、そこが政策転換の中で進んだ面に転化する。農業問題抜きにして、21世紀を担う地域と一国の独立は無い。中小企業で言うと、食品工業の比率が全国平均は1割なのに対して北海道は4割で、ここにも可能性がある。先程の循環型の産業を創り出すことを含め、北海道には大きな可能性があるんです。

(2月某日・某所にて対談)

興味があれば読んでみよう!!

～対談者が推薦する関連図書～

- 国際連合食糧農業機関(FAO)編・国際食糧農業協会訳『世界食糧農業白書』(国際食糧農業協会、各年次)
- レスター・R・ブラウン編著、浜中裕徳監訳『ワールドウォッチ地球白書』(ダイヤモンド社、各年次)
- 農林水産省『図説、食料・農業・農村白書』(農林統計協会、各年次)
- 山田定市著『食と農の経済と協同』(日本経済評論社、1999年)
- 豊川裕之著『食生活の現代的課題』(日本放送協会、1996年)

- 食糧政策研究会著『WTO体制下のコメと食糧』(日本経済評論社、1999年)
- 柴崎希実夫著『「食」の構造と政策』(農林統計協会、1998年)
- 東京農業大学食料環境経済学科編『食料環境経済学入門』(筑摩書房、1998年)
- 藤原邦達著『検証 遺伝子組み換え食品』(家の光協会、2000年)
- 山本博史著『現代たべもの事情』(岩波新書、1995年)

- 村井吉敬著『エビと日本人』(岩波新書、1988年)
- 鶴見良行著『バナナと日本人』(岩波新書、1982年)
- 石毛直道著『食事の文明論』(中公新書、1982年)
- 吉田忠著『牛肉と日本人』(農山村文化協会、1992年)
- 吉田忠他編『食生活の表層と底流』(農山村文化協会、1997年)

- 吉田忠・秋谷重雄他編『食生活変貌のベクトル』(農山村文化協会、1998年)
- 地域経済学会編『漁業考現学』(農林統計協会、1998年)
- 栗原はるみ著『たれ・ソースレシピ』(フジテレビジョン、1998年)
- 大村次郎著『アジア食文化の旅』(朝日文庫、1989年)
- 島村茶津著『スローフードな人生』(新潮出版、2000年)



講義紹介

国際経営論 (1部) 牛丸 元

学生A: 僕が関心を持ったのは組織同型化の理論のところ、企業の海外進出には横並びの傾向があるという点でした。最近の日本企業の海外進出の傾向はどのようなものなのでしょうか。

牛丸: 最近でも横並びの行動は見られますが、最もその傾向が見られるのはバブルの前後、1986年から1996年くらいまでで、その頃の日本企業の行動がかなり横並びであったことが証明されています。証明の仕方にはいろいろありますが、組織同型化の理論で重要なことは、同型化には二つの原理が働いているということです。一つは効率性の原理で、経営戦略をしっかりと練った上で意思決定をした結果として、横並びだったというものです。つまりよく考えて努力して行動した結果、他社と同じことをしていたというものです。もう一つは正当性の原理というもので、綿密に分析した結果というよりは、むしろまわりの会社がするからうちの会社もやろうと。例えば、

松下電器がやっているのだから間違いはないだろうから、うちの会社もやろうといったものですね。後者の原理に基づいて海外進出を行った場合は失敗することが非常に多いです。私が調査した結果では、バブル期に海外進出をした日本企業はむしろ正当性の原理に基づいたものが多い。今多くの企業が海外から撤退してはいますが、その多くは正当性の原理のような曖昧な基準で海外進出をしたものですね。

学生B: 先生の授業では具体的な企業の名前がよく出てきますが、どうやって調査などを行っているのですか

牛丸: 国際経営論は、1980年代になってからようやく日本の一部の大学で科目を設け始めたもので、事実の蓄積が非常に少ないのが現状です。学問はまず実態を見て、そこから抽象的なことに落とし込んで、一般的なことが言えないかということから理論をつくる。そうして理論を作ったらそれを検証しなくてはならない。そしてその検証がうまくいって、自分達の理論が正しかったということになる。国際経営論の場合、まだ理論が不足しているし、実証データの蓄積も十分ではないので、かなり調査を通じて事実の蓄積を積み上げていく必要があるわけです。調査方法はいろいろありますが、ビジネス雑誌を読んでそこから資料を持ってくる場合もありますが、実際に自分で企業にヒアリングして調べるということもあります。また授業では、数値や統計などもよく用いられていますが、これも同じことです。

学生C: 海外子会社をコントロールするには四つのパターンがあってそれは環境と戦略と組織構造がうまくマッチして初めてうまくいく、ということですが、例えば、日本企業ではど

こが、うまくいっているのでしょうか。

牛丸: 例えば、松下電器などはうまくいっている会社の一つでしょう。家電業界で最も要求される戦略は、低コストでモノを生産することです。そこで松下のように中央集権的で、海外子会社に権限を与えていないような組織構造がグローバルな競争に勝つためには適切なものであるわけです。その一方で、日本国内では業界のリーダー的な企業でも、海外での市場環境にうまく対応できない会社も多くあります。

学生D: 授業の中で四種類の国際組織モデルがありましたが、その中でもっとも理想的なモデルとはどのモデルでしょうか。



牛丸: 敢えてあげれば、トランスナショナル・モデルでしょう。これは、効率的で、様々な市場に対応出来て、なおかつイノベーションを生み出しやすいといった三つの条件を兼ね備えた組織モデルで、実際にこうした組織をつくりだすことは非常に難しいのですが、ABB社やネスレ社などがそれに近い組織といえるでしょう。

学生E: 国際経営論と経営学との境目がわからないのですが。

牛丸: 国際経営論と経営学との境目はないです(笑)。経営学が主に対象とするのは、ソニーやトヨタのようなグローバルな展開をしている大企業ですから、経営学自体が国際経営論とも言えるかもしれません。あえて分けるなら、経営学は主に理論的なことを行い、その応用系を教えるのが国際経営論と考えてもらっても良いと思います。

司会: 一年間講義を受けてみての感想を聞かせて下さい。

学生A: 教科書の内容とはひと味違う面白い話が多く、90分がとて短く感じました。二講目であんなに人が集まるのは、先生の人望や人柄が反映されているから(笑)ではないかと思えます。

牛丸: そこきつと掲載されないぞ(笑)。

学生B: グローバルという広い視野で、例えば、株の話から海外子会社の経営とかも詳しく勉強できたので、これから企業で働く僕らにとっても大変プラスになったと思います。

(12月14日 講義終了後)

現代経済理論 (2部) 「マクロ経済学」 笠嶋 修次

司会: ほぼ一年を終えつつありますが、今日の授業を聞き終えたところで、この講義全般についてはどんな思いがありますか?

学生E: この講義はしっかり出席していました。講義がポンポンと進んでいくので、少し早いかなとも思いますが、解り易く説明してくれていると思います。

司会: 今日の講義も結構、理論的な中身だったようですが、実際の経済に対する理解との関係ではどうですか?

学生E: 平成不況のことが理論的に説明され、なるほど、と思えるほど理解が深まったと思います。また、GDPの意味についてもよく理解できました。

学生F: 私も、設備投資・公共投資と不況とは本当に切り離せないものなんだな、ということがよく解りました。

学生G: ただ、私語の多い学生がいるので、彼らに対してはしっかり注意して欲しいですね。特に、大事なことを言っている時に聞き取れないと、本当に困ります。

笠嶋: 2部のこの授業は、これでも静かなほうなんです。1部の現代経済理論はもっとうるさくて大変です。これは、他の科目も含めて、構造的な問題かもしれませんが――。

学生H: 私も私語をしている他の学生を叱ったことがあります。

笠嶋: 覚えてます。本来、私が注意すべきだったのですが――。有難うございました。

学生G: やはり、先生から注意してもらうのがいい。

司会: 講義の進め方などでは、どうですか?

学生H: 最初のオリエンテーションのとき、この科目は予習や復習をしないとだめだという話を聞きましたが、一年を終えて本当にそういう姿勢できちんと臨まないと置いていかれるな、と実感しています。

笠嶋: 現実の経済の動きをマクロ経済理論で説明するという方針でやっているんですが、理論特有の分析の仕方は初心者には少しとつき難いかもしれません。とくに私の講義では、グラフを使った説明と分析が中心となっていますが、そのあたりはどうですか?

学生H: 講義を受ける前に簡単に予習していても『あれ、このグラフは何だったかな』ということがあった。同じようなグラフがたくさん出てくると、このグラフの直線の勾配の違いにどんな意味があったのか、とか――。

笠嶋: グラフ中の直線の勾配の意味や、その動かし方については、テキストよりは易しく説明しているつもりですが、この

ようなグラフを見慣れない人には、抵抗があるかもしれません。やはりグラフの読解には慣れが必要かもしれません。

学生F: グラフを使った分析の動きについていくのは、なかなか大変で、授業に少し遅れてくると黒板に描いてあるグラフの意味が解らなくなってしまうこともありました。

笠嶋: テキストではグラフの中での直線や曲線の動きを動的に理解するのが難しいので、私の講義では、いわば臨時的に黒板上で直線を動かし、財政政策や金融政策の効果やその限界を説明するという、やり方を行っています。ある程度予習して授業に参加すると、グラフの動的な動きが解り易くなると思います。

学生G: やはり、ある程度予習するという自分の学習が大事だと思います。また、講義の理解を深めるためには、毎回、毎回では大変かと思いますが、例えば前期と後期に一回ずつレポート課題を出してもらった方が、授業の内容をしっかりと理解するには良いかなと思います。

笠嶋: 第二学期課題のレポートを読み、私もレポートが授業理解の補完になると思いました。また、講義について本音を言いますと、ずいぶんとやったつもりですが、実はこれでも当初予定していた講義内容の半分ほどしかできなかったんです。

学生一同: え～!!

笠嶋: この一年間に行った講義はマクロ経済学の「入門中の



入門」のレベルで、物価水準の決定や物価と失業率の関係、為替相場と国民所得、金融・財政政策の関係など、講義で取り上げなかったトピックがまだたくさんあります。この一年、講義はステップ・バイ・ステップで丁寧にやってきましたが、このやり方だと一年間ではこのあたりが限界かもしれません。

司会: お話を伺っていると、方針を持ってしっかりと理解を積み上げていける講義だったようですね。どうもありがとうございました。

(1月11日 講義終了後)

英語講読 I・II (1部) 塩川 春彦

司会: 一年間通して、この講義を受講した感想を伺います。特に、この講義は、塩川先生からは『結構厳しく指導してきた』と伺っていますがどうでしたか?

学生I: 毎週の予習は大変で、分量は他の授業よりも多かったんです。予習には5時間かかったことがあったとか、夜中にもしっかりとやったりとか……(笑)。

塩川: 君は、どの程度かな?

学生J: 2時間くらいかかったこともあります(笑)。

学生K: この講義がためになったと思うのは、経済の言葉を英語を通じて理解し、専門に通じるように学習できたかな、ということですか。

学生I: 日本語でも聞かないような単語も学ぶことができたように思います。

学生J: 僕も、一年生なので経済に関係している文章を毎週やっていたということが、これから力になっていくと思っています。

学生L: 時にミスプリがあったので、最初にそれを言ってもらわないと、予習でとまどうこともありました(笑)。

塩川: 私の講義の方針は、経済学部の学生のための英語教育で、二年・三年・四年生になったとき、自分の専門の学習に役に立つように英語の教育をしたい、と考えています。ですから、経済経営に関するトピックを特に選んで、それを読むというのをずっと続けていたんです。とりわけ、一年生に適したテキストは市販ではなかなか売っていないので、自分で準備しました。だから、言われるようにミスプリ・ミスタイプが出て、さっきのようなことが起こっちゃったんです(笑)。

学生J: 高校でやっていたよりも、すごい量を一年でこなしたな、というのが実感です。

塩川: 英語については、どういう気持ちを持って取り組んできましたか。必要性は感じていましたか?

学生I: 単位を取らなきゃ、ということもあるし、中学・高校でやってきた力を生かしたいから、とも考えてます。

学生K: 他の外国語をやろうかな、と迷ったんですけど、中学・高校までやってきたことをここで止めるのはもったいない、やはりこれまでの力を失うのはもったいない気がして、英語を履修しました。

学生L: 僕は語学が好きで、英語は自分でも力を入れていきます。将来生かせるたいいな、と思って取り組んできました。

学生K: でも、この講義は内容が濃いので、ちゃんと予習して授業を受けていけばある程度成果がでると思う。だから、本人のやる気があれば、本当に成果がでる講義だったと思います。

学生L: 最初はつらかったけど、がんばって単位をとるぞ、という気持ちでやってこれたと思います。

塩川: この講義は、最初にオリエンテーションで「大変だよ」と説明した上でみんな受講してくれたからか、受講者が少ない中で皆よく勉強したと思います。また、教える側にもやりがいのある授業でした。ほんとはよくがんばったと思います。

(1月16日 最終講義終了後)



私の履歴書



▲20歳のころ

【水野 邦彦教授：哲学】

経歴

1960年——東京都に生まれる
 1993年——一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位修得
 日本学術振興会特別研究員、法政大学社会学部兼任講師、群馬大学非常勤講師、山梨県立女子短大非常勤講師、高崎経済大学非常勤講師、韓国・高麗大学民族文化研究所客員研究員、中央大学経済学部兼任講師、桐朋学園大学非常勤講師、一橋大学非常勤講師、東京農工大学非常勤講師などをへて、現在に至る

●主要著書

『美的感性と社会的感性』、1996年、晃洋書房
 『社会哲学の論点』、2000年、梓出版社

ホームタウン

私の本籍は静岡県ですが、静岡のほかには東京・松本・名古屋に住んでいましたから、出身を聞かれると「おおむね東京です」などと答えています。私のイメージでは、東京は漠然とした空間で、いま思えば住みよいとはいえません。実際、「東京」という街があるわけではなく、いくつもの街の集合体を東京と呼んでいるのでしょから、とらえどころがない気がしますね。それに比べれば名古屋や松本のほうが居住には適していると思います。ただし名古屋は「都会」というより「大きな田舎」のような感じがします。街は近

代化されていますが、生活感覚が都会的ではありません。もちろん松本はもっと小さい街ですが、ふまじめな高校生がなげなしの金でジャズ喫茶に通ったり、蛭カラ気どりで寮歌を歌ったりするには楽しいところでした。札幌は抜群に暮らしやすい街だと思います。街の中心部がとても合理的にできているし、とくに北海学園大学は通うのに便利です。ただし、北海道では自動車が交通法規をぜんぜん守らず、我がもの顔に走りまわるのは閉口します。

学生時代

大学一年生のころ下宿で小説ばかり読んでいた時期がありました。とくに開高健が好きで、新潮社の『開高健全作品』を図書館で借り、ついにそれを自分で買いそろえました。去年ふと「ロビンソンの末裔」という小説が北海道を舞台にしていることを思い出し、約20年ぶりにそれを本棚から出して読みました。

私は大学卒業後すぐに大学院に行ける状況ではなかったので、いくつかのアルバイトをして学費をかせごうとしました。郵便局の非常勤職員として郵便配達もしていたのですが、原付バイクで配達しているときに車とぶつかり、左膝を骨折してしまいました。このときの慰謝料はもちろん入学金にあてました。ちなみに私は一昨年も北海道で車にはねられたのですが、郵便配達するときも一昨年も、車とぶつかった瞬間の記憶はありません。これはたぶん、おそろしい記憶は消してしまおうとする防衛本能なのでしょう。それはともかく、大学院のときは学費と生活費を捻出するた

めに、つまらないアルバイトもしました。大きな声ではいえませんが、ゴーストライターまがいの原稿を書いたときは、たしか30万円ぐらいの収入になりました。また、アメリカの大学生たちが編集した『Let'sGo』という旅行ガイドの翻訳は10万円程度の金になったかと思いますが、これは辞書に載っていないような若者の俗語が多く、難儀しました。学術的なもの、アルバイトとしてのものを含めて、いくつか翻訳はやらされましたが、おかげで文章表現の修行にはなりました。たとえば「A of B」という文をぶつう私たちは「BというA」とか「BのA」とかいうふうに訳してしまいがちですが、この文を書いた人は頭のなかでAとBの順序を逆にして考えてはいないでしょうね。それで私はときどき「AとしてあらわれたB」なんていうように工夫してみました。ほかにも工夫を試みた表現があったと思いますが、忘れまして。

哲学

高校生のころ私はジャズに没頭していて、人が音楽に感動するしくみを知りたいと思っていました。簡単にいえばそういう動機で私は哲学もしくは美学を志したのです。エッセ文学青年(?)をやめた私は、美学の古典といわれている18世紀ドイツの哲学書に取り組むようになりました。こうして知らず知らずのうちに西洋哲学の世界に入りこんでしまいましたがしばらくたって韓国・朝鮮に目を向けたとき、まるで世界が違って見えました。無前提に西洋の学問を選んで来た私は、痛烈な反省をせまられました。では、どういう態度をとるべきかについて

は今も結論は出ていませんが、韓国とは多少のつきあいができましたし、自分の課題として韓国社会を多少なりとも学術的に研究してゆかなければと思っています。私は講義で「哲学」を担当するとともに、ゼミでは韓国社会論をテーマにして、学生諸氏といっしょに勉強しています。



▲3-4年生のゼミ合宿で。右端が私。

学生諸氏へ

大学というのは、やる気になれば何でもできる場所だと思います。それと同時に、自発的に何かをしようとしなければ、何もしないで年月が過ぎてゆくでしょう。まさに主体的な姿勢が問われるところだと思います。経済学や経営学はもちろん、その他どんなことでも、自分が関心のある事柄を徹底してきわめようとする姿勢が大切だと思います。そのために大学の先生方や図書館をいっぱい活用することをおすすめします。

【後藤 啓一教授：産業心理学】

経歴

1930年——札幌市に生まれる
 1957年——北海道大学文学部心理学卒業
 1959年——北海道大学大学院心理学専攻科修士課程修了
 札幌医科大学心理学助手
 北海道大学大学院心理学専攻科博士課程中退
 1963年——北海道大学医学部公衆衛生学助手
 1965年——北大文学部心理学助手
 1966年——北海学園大学経済学部助教授
 1973年——同大学教授
 1995年——金沢大学大学院医学研究科より医学博士号を授与される
 学位論文は「燃えつき症の心理学的評価とその免疫機能異常に関する研究」
 2000年——北海学園大学大学院経営学研究所教授



▲金沢大学長岡田先生より学位状をうける

1978~1982年— 本学就職部長 / 1982~1984年— 本学経済学部長 / 1992~1998年— 本学就職部長 / 北海道未来研究所理事 / 北海道高齢者雇用促進委員会会長 / 北海道家庭生活カウンセラーセンター審査委員

学問との出会い

大学に入る前は心理学をやるとつもりは実は全くなかったんです。神学を学ぼうと思い、キリスト教系の大学に入学しました。そこで、札幌の宣

教師の方から紹介いただいていた先生がカール・ロジャースという心理学の大家の直弟子だったのです。その先生について心理学を学んでいくうちに、心理学に興味を持ち、北大の文学部に編入学しました。

赴任まで

大学院の博士課程の一年目の時に、札幌医大に心理学の科目が出来るので助手としていかないかという話がありました。それが昭和34年の8月です。私の方も、早く現場に出て、医学系の人と共同研究をしたいという希望もあり、その話を受け、札幌医大に進みました。その後、恩師の故安倍三先生から声がかかり北大医

学部の助手として昭和38年から三年間過ごしました。その後、北大文学部の助手を一年間経て、昭和41年に北海学園大学に経営学が開設されるということで、そこでまずは経営学部の担当者として赴任することになりました。

ライフワーク

現在、学部の学生さんに講義している産業心理学では組織と人、健康と人、消費と人の三つの分野を中心に進めています。私のこれまでの研究は、それよりはもう少し焦点を絞ったものです。まず卒業論文では、不安とストレスの研究を選択しました。その研究をやりながら、ストレス研究は自分のライフワークだと心密かに考え、大学院でも同様の研究を様々な先生の御指導を受けて進めていきました。その間、ますます現場の問題が私にとっての関心事項となっていきました。フィールドワークということで、様々な企業に調査に出かけ、人間関係の緊密度が生産性にどうかかわるのかといったことをソシオメトリーといった方法を使いながら研究をしていました。現在の研究テーマに関わる研究をはじめたのは本学に赴任して、組織の心理学的なアプローチをはじめた頃です。実態調査などを通じて、ビジネスマンのキャリア・デベロップメントを見ていくと、途中で挫折してしまう人がいますよね。例えて言うと、バーンアウト、ラストアウト(錆び付き度)というものです。バーンアウトとは文字通り身も心も燃え尽きてしまうことですが、ラストアウトとは持てる能力が発揮出来ずに、空中分解してしまうような現象です。そして様々な現場研究を通じて蓄積されたデータの中から、心の不健康がからだの仕組みとどう関わるのかということに興味が移ってきました。からだのはたらきを支えるものには自律神経系、内分泌系、免疫系があります。その内前二者については、多くの研究があったのですが、免疫系の研究は非常に乏しかった。その頃私のもう一人の恩

師である岡田先生から、免疫とストレスの研究をやらないかという声がかかりました。その時、岡田先生は札幌医大から金沢大学に転出されておりました。そこで昭和55年から金沢大学の公衆衛生学講座で研究を続けました。ストレスを浴びると免疫がどのような影響を受けるかということの研究テーマにしたわけです。具体的には、燃え尽き度を心理学的に明らかにすること、細胞性免疫がどう変わるかということです。その結果、バーンアウトが高い人は免疫性細胞の一つであるナチュラルキラー(NK細胞)の活性度が低下しているということがわかりました。さらに国内外の文献を集めていくと、NK細胞の活性度が低下してくると心の動きが低下してくるという論文が目に入ってきました。そして、この問題を軸にして取り組んだのが、「燃え尽き度の心理的評価と細胞性免疫機能に関する研究」という博士学術論文です。ビジネスマンのキャリア発展と免疫性の相関関係を追求するのは、今の私の研究テーマでもあります。それが、人的資源開発の問題にも繋がってくるわけです。



▲ゴトウゼミOB会にて(左から2人目が私)

後藤ゼミ

後藤ゼミの活動は本を読むだけでは無い、書齋科学ではなく実践科学であるということをもっと一にやってきました。そこで外に出ていろいろな企業の調査などにも学生を積極的に参加させてきました。もう一つは外国を経験させようということで、ホームステイを通じた海外研修を昭和48年頃からはじめました。当時はゼミ単位で学生を連れて海外に行くなんて大丈夫なのか、という心

配の声も多く聞かれたのですが、無事に現在まで続いています。中には、アメリカに留学したいと言い出し、シアトルのワシントン大学に入学した学生もいましたよ。それから飲み会を良くやっていましたね。ゼミをそのまま居酒屋でやるような感じでした。また卒業生たちとは、年に一度、全日空ホテルでOB会を行っています。

メッセージ

自分の横を見るのではなく、縦を見ろと言いたい。自分と似たもの同士の関わりでは所詮新しいものは生まれにくい、自分と異質なものを見つけるようにしろということです。それが学生のパワーを創造するものです。自分に無いものを人から吸収して自分を変えていってほしいと思います。4月から社会に出

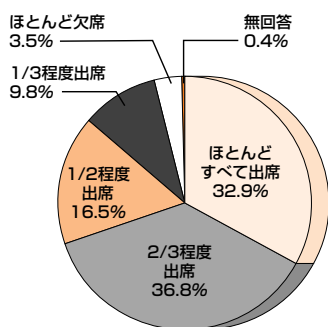
ていく学生さんに対して、自分の持っているエネルギーを錆び付かせることなく、燃焼させるためにはやはり異質なものを導入するようにつとめて欲しいですね。横並びの人間感覚は、組織の中では必ず脱落していくでしょう。これから大学生活が続く現役の学生さんにもこれから社会に出ていく皆さんに対してキーワードは「変化」ということです。

出席しても授業が理解できない？

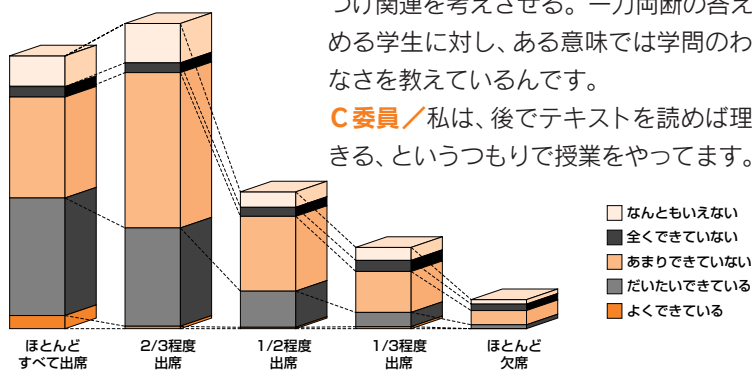
一 経済学部自己点検報告『教育と研究Ⅱ』 「授業に関するアンケート集計結果」(2001年)より(1)

自己点検報告の授業に関する学生のアンケート結果を手がかりに、
教務委員の先生方の誌上対談を連載します。
第1回は『学習態度と理解』についてです。

1 あなたはこれまで授業にどれくらい出席しましたか



2 授業はどの程度理解できていますか



自分で学習したり、友達の助けを借りたり、
リクツがわかった上でやると、同じ計算問題
を解くのも理解が違うでしょう。

司会／より理解を高めるには、何が必要で
しょう？

A委員／学生にきちんと理解させるには、計
画的な授業が大事です。私は授業のねらいや
まとめを一回一回整理し、学生は一度の授業
に出て解った、という感想をもって帰る。綿
密にわかってもらう工夫が必要です。ただ内
容や分量は犠牲にせざるをえません。

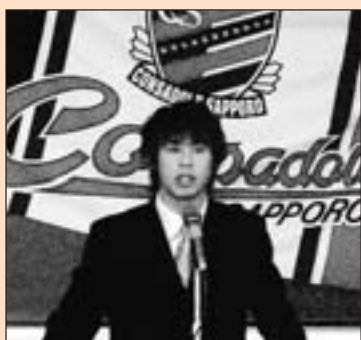
C委員／講義の中で練習問題を出す方法もあ
ります。テーマによっては、この形式がとれ
る講義は結構あります。

B委員／自学自習をする、授業に出ればわか
るというものではなく『考えたり調べたりす
ること大事だ、それが高校との違いなんだ』
という自覚も大事です。明示的な結論だけ
でなく、いろんな考え方、可能性が示され
るのが大学なので、決まったことをただ伝
達されるだけではないのです。

C委員／私語も理解の妨げになっています
が、きつく叱ったら静かになります。「そ
この茶髪の学生さん、しゃべるんやったら
出ていってくれ」とか、私語が講義の妨
害になっていることも理解させなきゃい
けない。

A委員／授業の外で議論することも、今の
学生はない。理解を深めるには、授業と
授業の合間に何かをさせ、そのために資
料を潤沢に準備したり、テーマを追求さ
せるなど、いろんな手だても必要です。
ですから動機づけにつながる環境をつ
くることも大事だと思います。

～次回は『成績評価』がテーマです。



山瀬 功治君 KOJI YAMASE 本学経済学部1年・コンサドーレ札幌所属 アジアユース選手権準優勝 世界ユース選手権・日本ユース代表(6月ルゼンチン) 出場決定おめでとう!!

2001年1月18日(木)、40番教室で山瀬君のお祝い会を開催しました。学生・教職員含めて約60名が参加し、世界にははたたく山瀬君に祝福と期待の気持ちを表しました。花束贈呈後、本人からアジアユースの感想を伺い、イランの食事になかなか馴染めなかったことなどが紹介されました。また、北海高校サッカー一部監督の島谷先生から「高校時代の山瀬君」の思い出をお話いただきました。その後、会場から山瀬君に質問が出され、照れながらも的確に答えていました。山瀬君は、再び日本ユース代表に指名され、2月23～25日に香港でのブラジル戦などに挑みました。彼が代表チームおよびコンサドーレ札幌で、より一層活躍することを期待するとともに、大学生活を楽しんでもらいたいと思います。